

走り読み文学探訪リバイバル(その32)

「死の競歩」 ピーター・ラヴゼイ (Peter Harmer Lovesey) 訳 村社伸

紹介者：榎本博康

[紹介]

1879年11月のロンドン郊外、イズリントンの農業ホールで「ウォップル」が開催された。これは6日間の徒歩競技でその総踏破距離を競う過酷なものであり、月曜日の午前1時スタート、土曜日の夜10時半に終了する。このウォップルという言葉はよろよろ行くという意味であるが、今日の競歩ではないので、走ってもかまわない。走りすぎれば疲れるだけだ。

16人がスタートラインに立った。実はこれは賭けレースである。ロンドンの労働者たちが、毎晩ここを訪れて、せっかく穴狙いでポンドを賭けたのにリタイアした選手に憤りながら、残っている選手に残りの金を賭け増すという、財布の中身を絞り尽くす興業である。

優勝候補は競技家のダレルと、アマチュアの誉れ高きチャドウィック大尉。しかし、ダレルは火曜日に全くでたらめのペースで走ったりした挙句、死亡。後でストリキニーネによる毒殺と分かる。

興業主のヘリオットとしては、トップ争いが無くなっては、客が来なくなり、興業失敗で大損との最悪の展開だが、素人のオフラティが大健闘。観客は盛りあがる。警察が入った犯人捜査。更に起こる殺人。競技が終わるまでは関係者が拘束されている。途中で逃げ出しては自白するようなものだからだ。この間に犯人は挙げられるのか。息詰まる競技と捜査。長いようで短い6日間。タイムアップは近い。

[感想]

「死の競歩」は19世紀末に実際に流行した「ウォップル」競技を題材にしたものであるといい、「本格ビクトリア朝ミステリ」という触れこみである。今年(2000年)の1月からは米国の長距離ランニング誌「マラソン・アンド・ビヨンド」に連載されており、多くのアメリカのランナー達の目に触れている。日本では比較的早く1973年に翻訳が出版され、1989年に再版と息長く愛読されている。

本書は1968年に英国の犯罪小説大賞で第一位となったものであり、1970年に出版された。ピーター・ラヴゼイの処女作であるが、彼はスポーツの歴史に造詣が深く、本書でもその力量が遺憾なく示されている。彼の第二作は「探偵は絹のトランクスをはく」、第三作は「殺しはアブラカダブラ」であり、捜査は本書と同じクリップ巡査部長とサッカーレイ巡査のコンビで、前者は素手のボクシング(これも酷い競技だ)、後者はミュージックホールに題材をとったビクトリア朝ものである。彼の小説は短編集も含めて今年の最新作まで25冊、邦訳は22冊が出てい

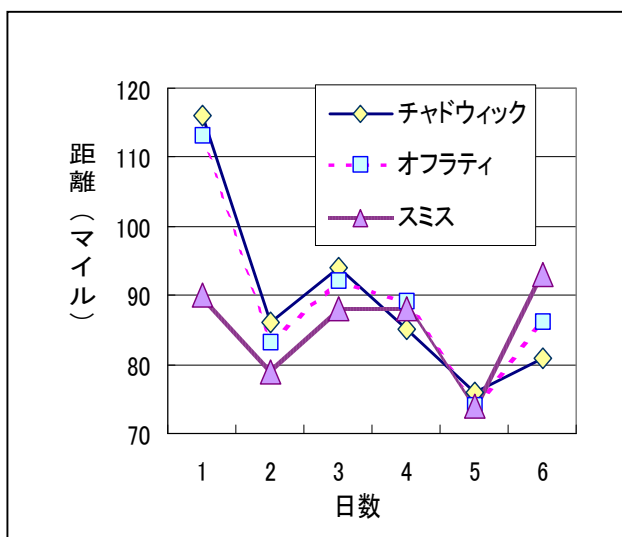


るが、他にペンネームを代えた作品もあるようだ。1991～92年には英国犯罪小説家協会の会長であった。

この本は実に面白いテーマを取り上げたものだ。6日間レースという設定はキリスト教の影響であり、絶対に日曜日は休むという前提のもと、このレース時間が決められている。以前に紹介した、あの「炎のランナー」の国だから、当たり前だ。

私は数日にわたる競技という発想に興味がある。これは賭け金を積み増して行くための重要な仕掛けであり、日本でも野球の日本シリーズや高校野球、大相撲などで、やっている人はやっているらしい。このような長期のスポーツは動物ではできない。渡り鳥や草食獣の長距離移動があるが、目的が違う。どの動物が6日間も同じ所でグルグルと連続走ができるのだろうか。人間ほどストレスに強い動物はないのではないかと。不思議なふしぎな人間の能力である。そして人間を戦わせて楽しむのは、ローマ帝国など古代からの伝統である。今でもプロレス、ボクシング、K1など観客を集めている。

そして賭けスポーツにドラッグである。ストリキニーネは、適量であれば、当然のこととして使用されていたという設定だ。これは違反ではない。ただちょっとそれが多量に殺人に使われただけだ。



ここで競技として記録を見てみよう。ラヴゼイは毎日の踏破距離を律儀に書いている。完走は16人中9人。左図に1～3位の毎日の距離を示すが、1位のチャドウィックは1日目に2位、ダレルの居なくなった2日目に1位をキープすると3日目にはオフラティの追い上げにあつて、彼を突き放すペースに上げ、4目は流してオフラティの追い上げを許して疲れさせる。5日目は疲労の極致で皆ペースが落ちるが、オフラティとの距離を保ち、6日目は間合いを取りながら無理せず優勝を確保する。優勝を目的とした巧いペース配分である。また、このレース展開は賭けを盛り上げるのに大

いに有効であったろう。一方スミスはイーブンに近い。初めから3位狙いであるが、彼が売り出す強壮剤の宣伝効果を目的としたものであり、犯人捜査に協力しながらの記録である。下位の競技者にも細かい心配りがあり、話の中心である競技を、犯罪捜査と共に丁寧に描き切っている。

(初稿2000. 8. 15)

[リバイバル感想]

初校はペース配分に気が向きすぎて、総距離が書いてないので、改めて紹介する。

1位	チャドウィック	538マイル	(861km)	500ポンド+チャンピオンベルト
2位	オフラティ	537マイル	(859km)	100ポンド

3位	スミス	512マイル	(819km)	50ポンド
4位	チョーク (中略)	495マイル	(792km)	10ポンド
9位	レイド	409マイル	(654km)	5ポンド
10位	ジェンキンス (中略)	200マイル	(320km)	— (3日目棄権)
16位	マーティンデイル	61マイル	(98km)	— (初日棄権)

1879年当時の1ポンドがいくらだったかは分からないが、とある換算サイトでは66ポンドであり、まあ1万円位の価値だろうか。5ポンドでは6日間の昼夜労働報酬としては不足だし、途中棄権では全くの損だ。いや6日間の食事がついているので、それだけでもお得ではないか。いやいや、それでは食い詰め者が集まってしまう。そこは抜け目なく、出場者は10ポンドの掛け金が必要である。ここが興行主の上手な所だ。

このような庶民の賭け陸上競技が行われていたので、オリンピックのアマチュア・スポーツという理念が生まれ、第1回アテネ大会が1896年に開催となりました。日本ではオリンピックは天から降ってきたもののようにですが、ヨーロッパではこのような流れの中で生まれたものでした。

(2021. 6. 05)